

(国語科)

自分の思いや考えを豊かに表現する子どもを育てる
一単元を貫く言語活動を通して読みを深める国語科学習指導一

大阪市立大隅東小学校 研究部

1.はじめに

本校児童は、国語科において、しんだんの結果などから「書くこと」や「読むこと」において、やや弱い面が見られる。また、学習に対する関心や意欲、積極性に課題がある。日常においてほとんど読書をしないという回答率も高いことから、国語に対する意欲が十分とはいえないことがわかった。

そこで、平成26年度から国語科を重点教科とし、「自ら進んで課題に取り組む子どもを育てる」というテーマを設定して研究を進めてきた。ワークシートや視覚的教材の工夫などにより、児童への興味・関心につながる「読みの課題」や「言語活動の課題」を設定することができ、国語科の学習への意欲を喚起できるようになった。同時に読書にふれる機会を多く取り入れたことで、読書に親しみをを感じる児童が増えてきた。

しかし、一方で考えたことをまとめて自分の意見を述べたり、友だちと自分の考えを比べて交流したりという点では、まだ十分ではなく課題が残った。

そこで、今年度は研究主題を「自分の思いや考えを豊かに表現する子どもを育てる一単元を貫く言語活動を通して読みを深める国語科学習指導一」と設定した。文学的な文章を中心に引き上げ、つけたい力を明らかにしつつ、そして、児童が、自分の学んだことをさらに活用していくことができるよう、単元を貫く言語活動を設定し、指導計画を工夫した。また、児童が、関心・意欲をもって学習に取り組み、内容を読み取ったり、自分の考えをしっかりと持ったり、豊かに表現したりできるように育成していきたいと考えた。

2.研究の内容

本年度は、研究主題にせまるために、次のような視点から研究を推進した。

(1) 研究の視点

1.単元を貫く言語活動に重点を置いた指導計画の工夫

指導計画を立てるためのポイントとして3点を挙げる。

- ①本単元でつけたい力を見極める
- ②つけたい力を確実につけるための最適な言語活動を選定する
- ③言語活動を単元を貫いて位置づける

従って、本校では、単元の基本的な学習の流れを「Ⅰつかむ・見通す」「Ⅱ広げ・深める」「Ⅲ表し・活かす」とし、まず本単元で身につけたい力を明確にした上で児童の実態をふまえ、単元の目標を実現するのにふさわしい言語活動を、単元を貫いて位置づけるよう指導を工夫した。

2.自分の思いや考えを広げたり、深めたりする交流のあり方

①自分の意見をもつための学習指導の工夫

児童が自分の意見をもつ拠り所となる事柄を収集し整理できるようにワークシートを活用している。また、書く授業時間内に書く活動を取り入れ、書くことにより考えを持てるようにしたり、さらに考えを深めたり広げたりできるようにしている。

②相手に伝わるように話したり聞いたりするための学習活動の工夫

「話す・聞くこと」については、「声のものさし」や「ハンドサイン」、「聞き方あいいうえお」「話型」の掲示などの活用により、声の大きさを考えながら自分の考えを伝えたり、

相手の意見のよさや違いを意識しながら聞いたりできるようになってきている。

また、授業の中で児童相互が意見を交換できる学習活動を意図的に設定し、ペア・グループ・全体など交流のあり方を場に応じて工夫している。

3. 読書活動の充実.

毎週水曜日の朝の学習時間を読書タイムとして取り組んでいる。また、保護者のボランティア活動による読み聞かせも行っている。学年に応じて、読書の記録として読書貯金や音読カードに記入し、1年間でどれくらいの本を読むことができたのか振り返ることができるようにしている。いつでも身の回りに本がある環境を作るために、学級文庫を整備している。学習につながる関連図書や人気のある本、調べ学習ができる本などをそろえるため定期的に入れ替えをし、読書への意欲を高めることができるように努めた。

昼休みの図書開放や委員会児童による読み聞かせ、読書週間の設定などに取り組んでいる。また、読書週間には児童集会での読み聞かせや玄関掲示を活用して児童の「おすすめの本の紹介」を掲示している。

国語科の学習において、児童に単元のゴールを意識させるため図書支援員によるブックトークや並行読書を取り入れた。紹介された本を中心に意欲的に読書に取り組むことができた。

(実践例)

○5年生「注文の多い料理店」では、単元を貫く言語活動として『本の帯』を作って、お気に入りの宮澤賢治の物語のよさを推薦しようという活動を設定した。

単元の始まりに指導者が『本の帯』のモデルを示した。5年生にとって『本の帯』を作るという活動は今回が初めての経験だったが、児童は見通しを持って意欲的に取り組むことができた。

3. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

各学年とも、単元のねらいを明確にし、その達成に適したふさわしい言語活動を位置づけ、見通しをもって読み進められるようにした。そのことで、児童たちは、言語活動を意識しながら、進んで「読みの課題」を解決していくことができた。また、解決しながら積み上げてきたことを活かす言語活動によって、達成感を味わうとともに楽しさも感じることができた。たくさんあるつけたい力の中からその単元でつけたい力を精選することで、子どもたちが具体的な目標をもって主体的に学習に取り組むことができた。

(2) 今後の課題

○どの単元でどのような力を身につけることが、より今後に活かせるのかをさらに研究していく。また、どれくらいの頻度で単元を貫く言語活動を行うのが効果的か見極めていく。

○国語で習得したことを他教科や特別活動などでも活用できるような場を設定し、自分の思いや考えを自分の言葉で豊かに伝えられるようにしていく。

○多様な考えを表現するだけでなく、それらの関係性をまとめていくような発問で言語活動の質を高めることも必要となる。授業の指導過程で、考えを広げたり、深めたりする発問の場面を工夫し、ねらいに迫る言語活動を研究する。

○たえず意識して言語活動の目的に応じた授業づくり、単元全体を通して児童が主体的に取り組むことができる学習の進め方、次につながるより効果的な評価のあり方についてさらに研究を深める。